

2020/9/8

(うとQ世話し 誤解覚悟で その4 )

以下にお話しするのは「アナクロ復活奨励話」ではなく「姿勢点検」のお話です。

本日も又、誤解覚悟で申し上げます。

「百聞は一見に如かず」

例えばネットで見る写真や動画も含めて「聞」と定義すると、ネットの情報はほぼ100%が加工2次情報(引き回し)なので、それよりは自分の目や耳で確かめた身の回りの現実世界の1次情報「見」の方が、自分にとっての「オリジナル」を得る確率は遥かに高いという風にも解釈できそうです。

又

「習うより、慣れろ」の後半文言を

「習うより、盗め」と敢えて替えてみると

相手が自分に気づいて自席にやってくるのを待ち、何も言わずとも、痒い所に手が届く様なおまかせメニューで「習う」より、学習方法もわからないところからスタートし、相手の技量を観察によって盗み取って分解し、自分なりに原理原則を組立てて「自分最適解」を見出す方が、遥かに頭を使い、工夫や推理推論を凝らす分、深く身に付くことは想像に難くない気がします。

昔気質の職人は、確かに「意地の悪い一面」もあったかもしれませんが、多くの例を見たところ、それ以上に「どうやったら確実に、しかも相手本人の為に最適な形で伝承できるか？」を自身の体験から熟知していたのではないかなと想像しております。

まず相手が上であるという「謙虚さ」がなくてはならない。

次に「教えてくれぬなら、それでよし。それでも俺は」という「盗むほどの意欲」がなくては、ならない。

三番目には「盗んだものを分析し、推理推論を重ねて原理原則を発見する」観察眼と知恵がなくてはならない。

第四には「それを自分流にアレンジする柔軟さとオリジナリティ」がなくてはならない。

そして最後に何より

「盗んでやる」と「盗めるものなら盗んでみろ」の「真剣勝負」と、その実「速く盗め、俺が目黒いうちに早く盗んでくれ。そしてもっと先に行ってくれ」の裏に隠された「慈愛」が人(後進)を育てたような気がしております。

席まで来て分かり易く教えてくれなきゃ、勉強なんかしてやんねえ」というのに、言われるままに「のこのこ出向く」ようでは、教える側、教わる側も、相互の先が見えた、も同然のような気もしております。

以上を踏まえて

自耳自眼見聞(じじ、じがんけんぶん)に基づく「自主自発」での自自「考」「行」

即ち、個々人の既成概念、現常識からの「自主独立」

これからは、それが何より大切な気が致します。就中、コロナ禍の向こうの「ニューノーマル時代」においては。